

アシスト

市川市サッカー協会第4種委員会 委員長 石原孝幸

ジュニアサッカーフェスティバル大成功！

先週行われた「ジュニアサッカーフェスティバル」はいかがでしたか。

コンセプトを「**参加するすべての子ども達がプレーヤーとしてサッカーを楽しむこと**」とし、各クラブがチームを組んで参加する形式ではなく、当日集まった子ども達がチームを組み、補欠や控えを無くし、すべての子ども達が楽しめることを目指しました。

当初の心配をよそに、子ども達は初めて出会ったチームメイトと直ぐに打ち解け、試合を重ねるごとに仲間意識も芽生え、会話も弾み、サッカーを通して友達を作るのはそんなに難しいことではないと実感できたように思います。そして何よりも参加した子ども達全員が大好きなサッカーを楽しみ、お土産までいただいて一日を過ごせたことをとても嬉しく思いました。

今回の催しは、スポンサーでもある南部支部副支部長の田所さんの提案から出発し、主管である北部支部の支部長後藤さんが4種委員会の活動として細部を整え、それを元に北部支部の各クラブ代表が話し合い、さらに調整を加え当日を迎えました。4種委員会としては初めての催しでしたので、1からのスタートでしたが、子ども達のためにお骨折り下さりありがとうございました。田所さん、後藤さん、北部支部の方々はこの場をお借りして御礼申し上げます。

さてこの催しの、子ども達を見守る私たち大人の心構えとして「市川の子を市川全体で育てること」をお願いしましたが、いかがでしたか。

当日は、各チームに1名ずつ、即席の指導者、審判員として付いていただきました。初めて出会うのは大人も一緒。最初は戸惑いもあったと思いますが、徐々に慣れて名前も覚え、ゲームの間には練習も行い、指導者としても楽しまれたことと思います。自クラブ他クラブの垣根なく、子ども達に接していただきありがとうございました。

フェスティバルが終わって、参加した指導者数名からお電話を頂戴しました。子ども達がとても楽しそうだったという感想に加えて、指導者に関する感想もありました。「子どもにとってもいいが、指導者にとってもよかった。」「罵声や怒鳴り声が全くなかった。」「いつもはもっと厳しい人がやさしく指示していた。」等。

確かに初めて出会う子ども達に厳しく接すると付いてきてくれませんから、指導する方は工夫が必要だったと思います。

普段接している子には厳しいが、接していない子には優しくなる。この差はどこからくるのでしょうか。

私の経験で考えてみますと、身近になればなるほど、自分の持ち物のように感じてしまう錯覚があるのだと思います。**自クラブの子が自分の持ち物のように思えてしまう錯覚**。この錯覚は多少厳しくしても付いてきてくれるという一方的な思いも容認してしまいます。この錯覚に勝利至上主義が結びつくと益々深みにはまってしまう怖さは、委員長通信17号にも書かせていただいた所です。この錯覚には魔力があります。私自身、この錯覚と勝利至上主義から抜け出すのに時間がかかりました。

もちろん、フェスティバル当日に、いつも自クラブで指導する時と変わらず優しくアドバイスできたという方も多数おいでだと思います。しかし、自クラブで指導する時とは違って、子ども達への声掛けの仕方や内容を大きく変えなければならなかったという方は要注意です。そういう意味では、指導者にとっても良い学習の場になったと思います。

今年のスポーツ界は、体罰やパワハラの問題が多数表面化しました。中でも体操コーチの、選手に対する体罰の映像は衝撃的でした。私の言う「錯覚」の最たる形でしょう。指導者が教え込もうとしすぎると「錯覚」に気付かず、エスカレートしてあんなになってしまうのかもしれない。しかし、数年前とはいえ未だにあんなことを…。

それに比べて、大坂なおみ選手専属コーチの、選手に対する対応は対照的でした。彼はテニスに立ち向かう選手を尊重し、常に選手に寄り添い、適切なアドバイスを心掛けているように思いました。しかもとても自然体で。

どちらが私たちの手本となるかは言うまでもありません。自戒を込めて、「**教え込もうとするのは危ない。サッカーに向かう子ども達にアドバイスするという姿勢を貫く。**」

市川市サッカー協会第4種委員会はこれで行きたいと思います。